

B 119 被服工作に関する研究

羽織の袖付および脇縫い代の安定性について

岐阜女短大 山田令子 聖徳学園女短大 O 堀てる代

目的 和服の縫製について経験的、伝習的な技術だけでなく、理論的、合理的に行い、現代に即応した技術指導をしていくべき一連の研究を行っている。

和服は並幅をそのまま用いて、個々の体型に合った寸法で縫製される。その場合肩幅と後幅との寸法差により、あるいは布幅との関係により、縫い代のつれがおこり、美しい仕上りが損なわれる。そのため長着の袖付、身八ッ口および脇縫い代のつれについては、今までにいろいろと研究されているが、今回は羽織の縫い代の安定性について検討した。

方法 試料は材質の異なる布地5種類を使用した。寸法は一般に用いられる袖付23.5cm、身八ッ口9cmとして標付を行った。試料に製図用ペンを用いて、2cm方眼の線を入れて縫製し、方眼のずれをノギスで測定した。また縫い代を折り返すことにより、不足する分量を数式により求めた。自記記録装置付定速伸長形引張試験機を用い、つかみ間隔の距離を32cm（約袖付、身八ッ口の長さ）に相当）で伸長弾性率を求めて比較した。

結果 肩幅と後幅の寸法差が同じ場合は、縫い代が多いほどつれる。

縮緬、縮子は縫い代の多少にかかわらず、縫い代はなじむが、ずれはおきている。3%伸長時の各素材応力中、袖が高い値を示すが、実際縫製時における10kgの伸長は仲々困難である。